

マタイによる福音書24章36節 「知らされない時」

1A 「知らない」と言われる主

1B 携拳と地上再臨

2B 隠す神

2A 知らないことから生まれる姿勢

1B 謙虚

2B 目を覚ます

3B 思いがけない時のために用意

本文

マタイによる福音書 24 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、24 章に入っています。午後礼拝で、24 章を一節ずつ見て行きますが、今朝は 36 節を中心に見て行きたいと思います。「**ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。**」

ここの「**その日、その時**」というのは、いつか？と言いますと、「人の子が来られる」時であります。主が戻って来られる時、再臨の時です。24 章では、オリーブ山にて、弟子たちがイエス様に、「あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。(3 節)」と尋ねたことに、イエス様が答えられている部分になっています。それが 24 章と 25 章の 2 章全体に渡って、主がご説明されています。初めに惑わしがあり、それから世界的な大戦が起こります。その間に、キリスト者には迫害が来ます。そして選びの民、ユダヤ人にこれまでにない大きな試練が来ます。けれども、主が戻ってこられます。主が来られる時には、天変地異が起こります。こういったことをイエス様は語られました。そして、「これらのことをすべて見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。(33 節)」と言われました。

1A 「知らない」と言われる主

1B 携拳と地上再臨

ですから、イエス様は「これらの徴を見て、わたしが来るのが近づいているのを知りなさい。」と言われているのです。それなのに、ここでは「**ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。**」と言われているのです。一方では知りなさいと命じられて、もう一方ではだれも知りませんと言われています。一体、これはどういうことなのでしょう？

主が戻って来られることについて、新約聖書を注意深く見ますと、二段階あることを見ます。一つは、「教会のために天から降りて来られること。そして教会が空中にまで引き上げられること」です。

これをしばしば、携挙と呼びます。「I テサ 4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」キリストにある者たちが、引き上げられる出来事ですね。けれども、キリストが御使いたちと、また聖徒たちと共に地上に現れる出来事があります、それが再臨です。「24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」

数々の徴がともなって、主が近づいていることを知ることができるのが地上にイエス様が再臨される時です。けれども、思いがけない時に、突然、主が来られるのは天から降りて来て、キリスト者たちが引き上げられる時です。イエス様は、ここ 36 節でお語りになっているのは、何の前触れもなく突然、やって来る携挙のことを指していると思われます。

2B 隠す神

イエス様は、これがいつなのか、その日やその時は、誰も知らないと言われます。なんと、御使いも、子すなわちご自身も知らないと言われていました。すべてを知っておられるはずのイエス様が、そのようにご自分も含めて知らないというのは、どういうことでしょうか？さらに、イエス様は、イスラエルが建て直される時も、神のみが定めておられると言われているところがあります。「使徒 1:6-7 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」イエスは彼らに言われた。「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。」

イエス様ご自身が、私たちの側に立って、「神のみが知っておられる隠された部分があるのだ」ということを教えておられるのではないかと思います。

聖書に出て来る預言者で、いつもは示されているのに、ある時に示されないで困惑している姿が出てきます。エリシャは、いつも知識の賜物が神から与えられていました。主が、誰かある人が何をしているかについて、その知識が与えられました。イスラエルがアラムと戦っていた時に、アラムはどこに行っても、イスラエルによって待ち伏せされていて襲われました。それで、アラムの王は激しく動揺して、「2列王 9:11 われわれのうちのだれがイスラエルの王と通じているのか。」と問い詰めます。すると家来の一人が、「2列王 6:12 いいえ、わが主、王よ。イスラエルにいる預言者エリシャが、あなたが寝室の中で語られることばまでもイスラエルの王に告げているのです。」とまで言っています。

そんなエリシャですが、示されなかったことがあったのです。シュネムという町にいる女が、エリシャに食事を用意して、また屋上に彼の部屋まで設けてくれました。それで、エリシャは彼女にお礼をしたいと思ったところ、彼女が不妊であることを知りました。それで、エリシャは預言をし、男の子が生まれると告げました。男の子が生まれたのですが、何年も経って、その子が刈り入れの日に出かけて行くと、熱中症だったのでしょうか、父親に「頭が、頭が」と言って、彼を母親のところまで連れて行ったら、なんとその膝の上で死んでしまったのです。彼女は、夫にもそのことを告げず、雌ろばに乗り、急いでエリシャのいるカルメル山のところに行きました。そして、エリシャの足にすがりついたのです。しもべのゲハジが追い払おうとしたのですが、彼は言いました。「Ⅱ列王 4:27 それから彼女は山の上にいる神の人のところに来て、彼の足にすがりついた。ゲハジが彼女を追い払おうと近寄ると、神の人は言った。「そのままにしておきなさい。彼女の心に悩みがあるのだから。【主】はそれを私に隠し、まだ私に知らせておられないのだ。」」そう、こんなエリシャでも知らせてくれなかったのです。

使徒ヨハネにも、似たような体験がありました。黙示録において、イエス様が彼に対して、御使いを通して様々な啓示を与えられました。その中で、強い御使いが天から下って来て、獅子が吼えるように大声で叫びました。彼が叫んだとき、七つの雷がそれぞれの声を発しました。そして、こうあります。「10:4 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天からの声がこう言うのを聞いた。「七つの雷が語ったことは封じておけ。それを書き記すな。」」ヨハネは、その声は聞いたのですが、それを書き記すことを禁じられました。このように、主がヨハネに啓示されていたのに、敢えてそれを書き記すな、封じておけと言われたのです。

主がこのように隠す神であることが分かります。「申命 29:29 隠されていることは、私たちの神、【主】のものである。しかし現されたことは永遠に私たちと私たちの子孫のものであり、それは私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。」そして、こうも言われます。「イザ 45:15 イスラエルの神、救い主よ。まことに、あなたはご自分を隠す神。」ご自身を隠される方なのです。

2A 知らないことから生まれる姿勢

1B 謙虚

どうして主は、私たちに敢えてご自身の計画を隠されるのでしょうか？なぜ全てを明かしてくだらないのでしょうか？それは、神が神であられ、私たちが神の前にへりくだるようになるためです。「131:1-2 【主】よ私の心はおごらず私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや奇しいことに私は足を踏み入れません。まことに私は私のたましいを和らげ静めました。乳離れた子が母親とともにいるように乳離れた子のように私のたましいは私とともにあります。」私たちに、二種類の「知る」があります。一つは知識として、情報としての「知る」。もう一つは、人格的に知ることです。神は人格的にご自分を知ってほしいので、あえて知識においてご自分を隠されることをされます。ここで詩篇の著者は、及びもつかない大きなこと、奇しきことには足を踏み入れないと言っ

ています。それは、乳離れした子のように神の前にしているためです。高慢にならないためです。

インディアナ・ジョーンズで、「クリスタル・スカル」というシリーズがあります。クリスタル、つまり水晶で出来た頭蓋骨が、宇宙人のものだという事です。それをしかるべき神殿に返すと、宇宙人が復活します。そこに、ソ連からの諜報員がいます。彼女は何かに飢えていました。そうです、諜報員らしいです、「情報」です。彼女の言葉が、I want to know. でありました。宇宙人から出る光線を受けて、それで彼女は快感になります。どんどん、情報が与えられるからです。けれども、宇宙人は彼女をにらみ続けて、彼女はもうたくさんになります。それでもにらみ続けて、ついに彼女の目から火が出て、滅ぼされてしまいます。

知らないことがある、ということによって、私たちは乳飲み子が母に頼るように、神に身を避けるようになります。それは、辛い作業かもしれません。ヨブのように、苦しむ時にはなおさらのこと、「なぜ？」という思いから、離れることができなくなります。しかし、それでも主が何かを行われていることを信じ、そこで私たちは主の下でへりくだるのです。イエス様は、終わりの日について、御使いも子も、その日、その時がいつなのか知らないと言われました。それは、情報を知らないというよりも、父なる神が定められているのだ、そこに立ち入ってはいけないのだという意味合いが強いのです。ペテロは言いました、「1ペテ 5:6 ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神は、ちょうど良い時に、あなたがたを高く上げてくださいます。」私たちは、事の全てを知っている訳ではない、という慎みが必要です。

2B 目を覚ます

次に、「知らない」というところには、「目を覚ましている」ということが必要になります。イエス様は、この言葉の後に、「人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。」とされています。何をもってノアの日なのか？洪水が起こりましたね、その洪水は、ノアの家族が箱舟に入るまでは、その兆候が何もなかったのです。「38 洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。39 洪水が来て、すべての人をさらってしまうまで、彼らには分かりませんでした。人の子の到来もそのように実現するのです。」世界を水浸しにする大洪水ですから、何か予兆があってもよいものの、そうではありませんでした。ノアたちが箱舟に入ってから雨が天から降り、また地下水が地上に出てきて、それで一気に水かさが増していったのです。そこでイエス様が言われました、「42 ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。」

いつ来るのか分からないのだから、私たちの心理は、「ならば、今、用意しなくてよいだろう。」ということになります。「いついつまでに、やってください。」と言えば、その時までにはやろうとします。いかがでしょうか？地震が起こるのは、いつかは分かりません。けれども、この関東地域、いつ地震が起こってもおかしくないという話は聞きます。では、私たちはそのために用意しているでしょう

か？していませんね。でも、起こったらその時は用意しようとしても、すでに遅いのです。けれども、いつ来るのか分からないと、その動機付けもなくなっていきます。これが最も危険です。主が、「**その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。**」と言われた時に、それは「いつでも、わたしが戻って来る可能性がある」ということなのです。いつか戻って来る、ということではなく、「**今、戻って来られるかもしれない**」ということでもあります。

イエス様は、聖書の最後のところで、「しかし、わたしはすぐに来る。(黙示 22:20)」と言われました。すぐにでも来られる、という意味で、あなたがたはその日や、その時はいつか知りませんと言われています。ですから、もし悔い改めるなら、今です。もしイエス様に立ち返りたいと思うなら、今です。主はすぐにでも来られるかもしれないのです。いつか分からないのです。

3B 思いがけない時のために用意

そして、その日、その時がいつなのか分からない、というのは、「思いがけない時に来る(44節)」ということです。イエス様は、43-44節でまた別の譬えを使われています。泥棒です。泥棒は、何時に来るかを教えてくれません。もし知っていたら、「自分の家に穴を開けられることはないでしょう」と言われていますが、それは、当時の貧しい家は泥で作られていたからです。壁であれば、穴を開けて入ることができました。それが、思いがけない時、つまり、「おそらく来ないだろう」という時に、かえって来るものだよということです。晴れている時に、いきなり雨が降るとか。少し晴れであれば、「これからもずっと晴れた」と思うのが、私たち人間の計算です。これが、いかに間違っているかは、天気を見ればわかるでしょう。

それで使徒パウロは、産みの苦しみ、陣痛に例えてこう話しました。「1テサ 5:3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」平和だ、安全だと言っている時に、苦しみが襲いかかります。安全だなあとと思ったら、その時が一番危ういのです。私たち夫婦は、変な旅行をします。今は忙しくてなかなか行けませんが、観光で海外旅行に時間のある時は飛んでいました。その時、少し冗談で話します、「事故や事件が起こった直後に行きたいね。」と。何か事件が起こると、観光客が激減します。ですから、混んでないのでもいいし、また、安くなります。そして何よりも、その時は安全なのです。事故や事件が起こった後だから、気をつけているからです。何事も起こっていないと、慣れてきて、だれてきて、それで事故を起こすものです。けれども、本来なら、思いがけない時にこそ破滅が襲いかかるのですから、私たちはいつでも用意できているようにしないといけません。

前もって用意をすることが、あたかも不信仰であるかのように人々が話すことがあります。例えば保険に入ることで、悩む人がいます。それは、いざという時などという不信仰なことを考えているからだ、となります。私に言わせていただくと、その反対です。「万が一に備えることは、そういった事態がやってくるかもしれない。」という信仰が必要なのです。ノアがなぜ、箱舟を造れたのでしょ

うか？洪水が来るかもしれないから、と信じていたからこそ箱舟を造ったのです。私たちは、靈的な危機管理が必要です。何か悪いことが起こることを話すと、何かを批判的に評価すると、それが間違っているかのように思います。それはクリスチャンらしくないと、不信仰だと。そうしたら、イエス様こそがクリスチャンらしくない、不信仰だということになってしまいます。そうではありません、前もって次に起こることを知って、それに基づいて前もって行動するのです。そこには、不信仰どころか、信仰を働かせないとできないのです。

どうか、私たちがたとえ他の大勢が、右を歩いていても、主が言われるのだったら左を歩く勇気が与えられますように。みながノアの言うことを信じなかったのですが、その大多数が正しかったのではなく、神を信じたノアが正しかったのです。主は、このようにしてご自分の現われを待つ人々を探しておられます。「Ⅱ歴代 16:9 【主】はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心をご自分と全く一つになっている人々に御力を現してくださいるのです。」そして、心を一つにする人たちとは、祈り人たちです。信じて祈る人たちです。イエス様が、不正の裁判官の譬えを語られた時に、こう言われました。「ルカ 18 章 18:7-8 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」信仰が見られるでしょうか？というのは、それだけ信じて祈る人々が少ない、希少だということです。